

## 映画サウンドについてアラン・パーカーが語る — ピーター・コーウィ

アラン・パーカー卿は、30年間の映画作りで、思慮深く、挑発的で、常に楽しめる映画を製作する忘れがたい監督という評価を、ハリウッドと彼の出生地英国で確立した。彼の才能は、「ダウNTOWN物語」、「フェーム」、「エヴィータ」のような音楽もの、「ミッドナイト・エクスプレス」、「ミシシッピ・バーニング」のような緊迫のアクション映画、さらに「バーディ」や「ライフ・オブ・デビッド・ゲイル」のような政治性の濃い映画など、驚くほど広範なジャンルで構成されている。アラン卿はまた、現英国映画会議議長として新たな千年紀に向けてこれからの英国の映画方針を導く役割を担っている。そして、そんな莫大な仕事量にもかかわらず、このサッカー・ファンは、まだなんとかアーセナルのほとんどのホーム・ゲームを見にハイベリーに行っているのだ！



アラン・パーカー

●音については非常に強い思いがある。但し、今日のその誤用についても私は思うところがあるね。私は『サウンドデザイナー』という言い方は嫌いだね。もちろん、アンディ・ネルソンは私の最後の5-6作品でリレコ・ミキサーをやってくれて、私にとっては極めて重要な存在だし、アンナ・ベールマーもチームの一員として彼を補佐してくれている。

アンディはハリウッドのトップ・ミキサーじゃないとしても、トップ・ミキサーの一人ではある。

アラン卿は、撮影前に音の「ストーリーボード」を準備するやり方については嘲笑気味だ。

●それはナンセンスだよ。そんなのは無理で、とどのつまり私がクランク・イン前に書くものが脚本であって、脚本には音とか多分音楽への言及もあるかも知れない。そのシーンに欠かせない要因である限りね。映画の効果音は、ほとんどすべて後で付けるものだよ。撮影のところでは、それが本当に終わるまで、役者と首っ引きで、ストーリーをどう語るかとか、その他今我々がやっていることに掛かりっきりになってしまうので、その時にはとてもやれないことなんだよね。

そのチャンスについてはほとんど余地なく否定的だ。

●我々は、どんな新しいロケーションでも、我々がやる時は必ず現場音を同録するようにしているんだ。例えば「ミシシッピ・バーニング」で、我々は南部を隈なく巡って自然界の音を録音し、その雰囲気映画に込めようとした。でも音響スタッフはいつも多忙で、しかも彼らの最優先課題はダイアログを録ることだ。

彼は、約 90 パーセントの時間、ブームマイクを使う。

●その事については私は音の必要性にとっても気を遣っているよ。オリジナルのダイアログについても強い思い入れはある。ルーピング<sup>1</sup>\*は嫌いだから。これはクリエイティブな問題なので、ルーピングをやり過ぎるとドラマのリアリティが失われていくと思う。実は、自分はルーピングするのは 1%以下だよ。それは数値としてはかなり低い値のはずだ。

音のことを考慮する時、大半の一流映画製作者同様、アラン卿はまず劇場の封切りを最優先事項とみなす。

●今や、あの [6-トラック] スプレッドを使いこなしできるということは、とても凄いことだと思う。反面それはどういう種類の映画かに依るし、私が撮る類の映画では、サラウンドは賢く使わなければならない。これは他の何にも増してテストの問題なのだが、私がサウンドに意識を当てたいと思うのは、通常それがドラマの単純性を補ってくれるからなんだ。

●「エヴィータ」はオペラだったので、音楽は当然最も重要で、それは壮大でなければならなくて、劇場全体を鳴らす必要があった。対照的に「ミシシッピ・バーニング」のような映画では音楽も良かったけど、微妙な効果音というのがサウンドトラックに重要な貢献をしてくれている。

ドルビー・ラボラトリーズがよく受ける唯一の苦情が劇場用映画の音量が大き過ぎることについてだと伝えると、アラン卿は苦笑した。

●そのことは、我々全員がある程度有罪だと思うね。私も、「エヴィータ」がうるさすぎると苦情をもらったよ。「Shoot the Moon」では、ピアノに指 1 本だけ置いて、それでもほとんど全ての効果、すべての雰囲気を作っていた。ずっと長い間ダビングを続けるので、結局みんなある程度は聴覚障害になってしまうんだ！

●音がうまく運んでいると、本当にだれもそのことには気付かない。閃光・爆発音・迫力映画の出現で、現代映画は昨今、音の扱いが俗悪なまでに大音量になっている。音の美しさというのは、それが正しく、そして、最大限細やかに使われる時なのにね。それはバランスに尽きることで、すべてはストーリーに奉仕すべきなんだ。

●「レイジング・ブル」は私の大好きな映画のうちのひとつだけど、誰もがパンチやその他の効果音がとても驚くほど特別だと指摘していた。

では、映画は非常に美しい音楽があれば機能するだろうか？スタンリー・キューブリックが常に言っているのは、我々がシンプルなステレオに戻るべきで、意識をストーリーに集中させるということだ。音が観る人に届けられる方法の一貫性のためにも、アラン卿は、これ以上の多チャンネルを渴望してはいない。

●私が望む大切なもの、そしてそのための私の要求に対してドルビーがベストだからいつもドルビーと仕事をするんだけど、それは個々の劇場の一貫性なのさ。サラウンド・スピーカーの音が低くなっているか、あるいは必要以上に大きいのかは分からないじゃない。後方からの音が変わ

---

<sup>1</sup> looping: アフレコで特定のフレーズについて、フィルムをループ状にしてプロジェクターにかけ、俳優はそれがリピート再生されるのを見ながらいくつかのテークを続けて録る手法。

気になる時、それは多分ミックスの責任ではなくて、映画館のスピーカーの品質とか、そのバランスの取り方に原因があることが多い。

●私が自分の映画を上映しなければならない時、まず一番最初に私が電話するのがドルビーで、彼らがいってくれてラッキーだと思うよ。映画が上映されるすべての映画館でそうすることはできないけどね。

彼が映画を製作し、ポストプロする方法をテクノロジーはどのように変えたのか？

●不利と利点がある。告白しようか、スティーブン・スピルバーグと私自身がハサミでフィルムを編集する最後の監督だということだよ。ポストプロダクションでは、明らかにデジタル編集に大きな利点があって、でも私のエディタ、ゲリー・ハンブリングはずっとそうやってきたので、我々は今もフィルムにハサミを入れている。だけど、ゲリーはもう引退したし、スティーブンが最後のフィルム編集者かな！彼はその事実を非常に誇りに思っているし、名誉の象徴のようにそれを纏っているね。

DVD に関して、彼は慎重な熱意を表明している。

●今では、DVD のおかげでビデオのパン・スキャンという忌まわしい行為と決別して、映画製作者は正しい画面比で自分の作品を観ることができるようになった。しかし、音についてはあなたが家で非常に賢明に扱うことになる。サラウンドとフロントの適切なバランスはディレクターが意図したものを伝えるために家庭で不可欠なことで、但し自分の嗜好を加味するのももちろん良いだろう。

彼や他の多くの映画製作者は、今や顧客扱いされていない「多数の失われた観衆」（つまり 22 歳から 70 歳までの誰でも）が DVD で映画を見ると期待していた。

●しかし、ここまでの徴候では、それは起こらなかったし、DVD を買っているのはいずれにしろ映画館へ行く若い世代なんだ。でも自分は将来のために楽観的でいようと思う。その巨大な活性化されていない観衆がまだ向こうにいて、異なる観衆層がまた DVD を発見して激増するかも知れないだろう。

アラン卿は、過去の仕事を振り返り、どの要素をひとつ取ってみても、映画体験を急進的に変えたものはなかったと感じている。

●いろんなものがあって、そのひとつひとつが重要なんだ。より小型のカメラ、より速いレンズ、より良いフィルムストック、より速いフィルムストック、デジタル音、CGI。

将来に関して、彼は沈思する。

●観客の統計データではどんどん若く、若くなって、高齢の巨大な観客が失われている。そのため、創造的な作業についても巨大な領域が手つかずのまま。それはとても大きな懸念だと、私は思うよ。

●もちろん、DVD が成長して、より多くの人々が自宅により高度な設備を持つようになってきたのは確かだ。しかし、私は映画館がまだ行くべき最高の場所であり、音の面でも最高の基準の場

